



## 熱と光を与える人に

9月×日

ようやく文化祭が終わった。それにしても今年の夏はあまりにも暑すぎる。そうでなくとも暑い体育館は、演劇のために暗幕でしめきっている。まさに蒸し風呂だ。一般の生徒はしんどくなったら出られるけど、ヤツらは音響や照明の機材の番人だからそうはいかない。脱水症状すれすれでよくがんばったなあ。でも、フラフラのなかにも、やりきった充実感を見せている。そんなヤツらの姿は、やっぱり放送部員なんだよなあ。

さあ、次は体育祭。また一緒にがんばろうな。

\* \* \*

学校にはさまざまな行事があります。学年集会のような小さなものから、大きなものは文化祭や体育祭。それだけではなく、始業式、終業式、入学式や卒業式もまた行事です。行事のあるところ、必ず必要となるのが放送です。わたしは新規採用で現任校に赴任して以来かれこれ四半世紀、ずっと放送部の顧問をしてきました。はじめて出会った子らは、すでに40歳を超えていることになります。

赴任した当時、放送部室は生徒たちのたまり場でした。当時の部長と「このままじゃいけない」と熱く語りあったことを覚えてます。当時のわたしは放送部室に入り浸りでした。そして、ことあるごとに生徒たちといろいろな話をしました。夏には3日間の合宿を行いました。合宿ではなぜか山登りをしたり、夜には「儀式」を行いました。さまざまな行事を生徒たちといっしょにこなすことで、徐々に「たまり場としての放送部」が「スタッフとしての放送部」へと姿を変えていきました。いまや放送部は、すべての学校行事の放送スタッフとして位置づけられるようになりました。もちろんわたしも顧問として、生徒たちといっしょに放送を担当しています。

ちなみに、放送部員のなかには、卒業してからも活動に参加してくれる者もいます。合宿の手伝

いをはじめ、文化祭のように人手が必要なときには、わざわざ仕事を休んで来てくれます。誰よりも「裏方」を知っている卒業生たちは、教員にとって頼もしい助っ人です。「放送部に隠居はあっても卒業はない」が、卒業式の日に卒業生たちに送るわたしの言葉です。たとえ卒業しても、わたしにとってはやはり「放送部員」なんだと思います。

わたしは放送部員たちに、ことあるごとに「薪の教え」を語ってきました。「薪の教え」とは、キャンパーたちの間で語り継がれているもので、「薪は自らの身を燃やし細めながら、まわりに熱と光を与える続ける」というものです。わたし自身そう生きたいし、放送部員にもそう生きてほしいと願っています。

ところで、わたしと放送部員の間柄は、指導する側される側というわけではありません。わたしがもっともしんどいときに、わたしを支えてくれたのも放送部員でした。

2000年頃、どうしていいかわからないままに、わたしは手探りで性別移行をはじめました。しかし、まわりの同僚たちはとまどいの色を隠せませんでした。また、一部の生徒たちはわたしに対して露骨に「オカマ」呼ばわりをしていました。そんなわたしに、変わらず接してくれていたのは、やはり放送部員でした。ある放送部員はテレビの取材に答えて「土肥ちゃんは土肥ちゃん。土肥ちゃんの性別？ 男・女・どっひーかな」と語ってくれました。それを聞いた他の部員も「そうそうそう」とうなずいていました。こういう放送部員に囲まれていたからこそ、わたしはわたしを見失なわずに今までこられたのではないかと、今あらためて思います。もしかしたらわたしにとって、放送部員は「生徒」というよりは「仲間」なのかもしません。

と、さんざんほめたけど、しめきった部室内でデュエルマスターズやるのはやめてくれないか。汗臭くてたまらん。  
(高校教員 土肥いつき)